

Qún ér bù dǎng
群而不党

群して党せず〈衛霊公第十五〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄



漢字には、似た意味を表わす文字がたくさんあります。『論語』に、「君子和而不同，小人同而不和（Jūn zǐ hé ér bù tóng, xiǎo rén tóng ér bù hé）」（君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず）〈子路第十三〉という有名な一節があります。この文全体の意味から切り離して「和」と「同」二つの文字を比較してみると、いずれも同じような意味を持っていることがわかります。例えば「付和雷同」。付和も雷同も世間の趨勢に無条件に同調することを表わしています。

しかし場合によっては意味が異なるばかりか、まるで正反対の意を表わすこともあります。「和而不同」（和して同ぜず）「同而不和」（同じて和せず）はその顕著な一例です。この場合の「和」とは、異なったもの同士が調和することを言います。これに対して「同」とはすべてが一致することを言います。『論語』ではこの両者の微妙な差異を「君子」と「小人」という全く正反対の概念に当てはめて説いています。つまり、すべての面で相手に同一性を求め、それを拒む者を排除するのは賢い人間のすることではない。相手の異質性とどう向き合い、どう調和を図るか、それこそが肝要だと説いているのです。漢字にして僅か12文字。それでいて人間関係から国際関係の在り方までを、見事に言い尽しています。

これに似た表現が表題の「群而不党」です。全文は次のようになっています。「君子矜而不争，群而不党（Jūn zǐ jīn ér bù zhēng, qún ér bù dǎng）」（君子は矜にして争わず、群して党せず）〈衛霊公第十五〉。君子、つまり指導力のある人間は、誇り高いが争いごとはしない。「矜」とはプライドが高いことです。プライドが高いこと自体は良いこと

ですが、そういう人はとかく争いごとに巻き込まれやすい。高いプライドを保ちつつ、しかも争い事にも加わらない。それが君子だということです。

また「群して党せず」とは、群れをなすが徒党を組むことはしないということです。「群」の原義は羊が群れをなすことを表わしています。羊の群れはおおよそ自由で無秩序に見えますが、羊飼いを中心に一定の秩序が保たれています。こういう自由で且つ秩序ある集団をつくるのが君子だということです。「群」の文字は、現代的用法としては「群集心理」などの語が示すように、時としてマイナスイメージを持つことがありますが、『論語』に関する限りそのイメージはありません。

これに対して「党」は党派を組むことです。党派を組むことは必ずしも悪いことではありません。「党」はもともと行政単位を表わす語で、五百戸の小集落を指していました。『論語』でもこのような意味合いで使われている場合が何か所かあります。ところが一方、親戚、朋友等、小規模の私的集団を表わすこともあります。そしてこの私的な集団が公的な政治の場に紛れ込むと、一転して悪党集団に変わることにもなります。「群党」という言葉が示すように「群」も「党」も集団を表わすという点では同義語もしくは類義語ですが、その使い方によっては反義語にもなるわけです。

『論語』は一見、片言隻語の寄せ集めのようにもみえますが、このような言葉の微妙な異同を利用して、絶妙なレトリックを組み立てた書物でもあります。これも『論語』の魅力の一つと言えるでしょう。

（わりい「中国語で読む漢詩の会」講師）